

*field*

# それでも助けあう

エチオピア中央高原の農村で  
起きた事件から ■■■■■

田中利和

私は2007年の8月から、エチオピア中央高原、首都アディスアベバからおよそ南西110キロに位置するオロミヤ州南西シヨワ県ウォリソ郡ディレディラティ村に暮らすオロモ(Oromo)の人々を対象に、在来の有畜農業について調査を行ってきた。

村の人口は1600人ほどで、標高2000メートルの高低差のすくない平地にある。主要な生業は、主にテフ、小麦、エンセーテ、チャットなどを栽培する農業と、ウシ、ヒ

ツジ、ヤギ、ウマなどの家畜飼養である。年間降水量は1200ミリ前後で、比較的降雨に恵まれた国内でも有数のテフの穀倉地帯である。雨季の始まる5月から8月にかけてのおよそ3ヶ月間、テフの播種床を整えるための牛耕を行う。私はこの有畜農業にみられる牛耕に焦点を絞り、これまでフィールドワークを実施してきた(写真1)。

これまでの研究で私は、牛耕に必要な2頭1組の去勢牛をもつ世帯は所有する畑を耕作期間内に十分に耕せており、そのうえで余った耕起力は、畜力や労働力をもたない世帯に分配されていることを明らかにした。今私はこの余剰分配などにみられる、人々が助け合う仕組みをどのように理解



写真1：テフの鎮圧作業と牛耕を協同で行う様子。

したらよいかという点に強い関心を抱いている。本稿では、村に住む男性ブーシェ(仮名)が起こした事件を紹介することを通じて、私が感じたことを記してみたい。

2007年8月、私はディレディラティ村の中でも比較的裕福で、私と年齢の近い家族が多くいるバルチャさんの息子として受け入れてもらい、調査を開始した。調査の初期に出会ったのが隣人のブーシェである。ブーシェはバルチャ家とも良好な関係を結んでいた。当時彼は結婚して2年目で年齢はおよそ34歳であった。彼の第一印象は「陽気さ」と「前向きさ」の2点である。一見して彼は村人

の皆に慕われている人気者のように思えた。私の調査という仕事もすぐに理解して、出会った当初から全面的に協力してくれた。

3ヶ月にわたった初めての調査の最終盤のことである。しばしの別れの挨拶も込めて、ブーシェと一緒に地酒を飲みたいと思った。彼は近隣の街ウォリソで数々の武勇伝を残しているほどの遊びの達人で、「あいつは人間ではない」と形容されるほどの酒飲みでもあるという噂を聞いていた。親友となったブーシェの武勇伝を、帰国前に盃を交わしつつ本人の口から直接聞いてみたいと思ったのである。ブーシェの家を私の調査助手であり弟つまりバルチャさんの息子でもあるムティックと共に訪ねると、彼は私たちを家に招き入れてくれた。いつものように定型の挨拶を交わす。「元気か?」「元気だ、君は元気か?」「僕は元気だ」。同じようなやりとりをオロモ語で数回繰り返す。しかし、いつもの快活な様子ではない。

ひととおり挨拶が終わったあと、「元気に見えないけど、どうした?」と拙いオロモ語で聞くと、「今日は少し調子が悪い、でも元気だ」とブーシェは答えた。「病気かな? 風邪?」と聞き直すと、何の躊躇いもなく「HIVポジティブって知っているか?」と答えた。続けて「俺は昔、街のブンナベットで女の子と沢山遊んだから、この病気をもらった」と、何でも知りたがる調査者の私に、簡潔なオロモ語で説明してくれた。私は思わずお酒を誘いにきたのも忘れ、頭が真っ白になると同時に、自分が病気に冒されたかのような絶望的な気分に襲われて、黙りこんでしまった。そんな私の心情を覚ったのか、ブーシェは「たまに調子は悪くなるが、死なない、薬もあるし、もらえるから」と私を気遣うように説明してくれた。この日はお酒に誘うのを断念し、ムティックと共に家を出た。道中ムティックにその事実を知っていたかと尋ねると、「村の人はみんな知っているよ」と答えた。さらに、ブーシェの奥さんもHIVポジティブなのかと尋ねてみると、「僕は知らないが、彼女は薬をもらっていないみたいだよ」とだけ教えてくれた。

2009年の5月、ブーシェと出会ってからおよそ2年が経ち、ようやく、念願の研究テーマである牛耕を調査することになった。ブーシェは相変わらずの陽気な調子で、「うちの畑も耕しにこい、お

前の家の牛耕以外も見る必要があるだろう」と説いてくれた。牛耕は2頭1組の去勢牛のペアを基本として畑を耕す。私が世話をされているバルチャ家は去勢牛を4頭2組もつ。去勢牛を1頭しかもたないブーシェの世帯は、どのように耕起作業を組み、畑を耕すのか。調べるには絶好の機会であると思い、彼の家の牛耕に一度だけ参加させてもらった。

ブーシェは自分と同じく去勢牛を1頭しかもたない隣家からウシを借り、ペアを作つて耕起作業を行つた。通常このような場合はウシだけを近隣世帯から借りるのであるが、その時は隣人も彼のウシと共に畑を耕しにきていた。私がその隣人に、いつもブーシェの畑を耕すのかと質問したところ、体調の悪い時は彼だけでは耕しきれないで、地域の人々が交代で助けあうとの答えだった。その日のブーシェは、いつもの陽気な様子で「代わってくれ」と隣人に遠慮なく甘えながらも、自分のできる範囲で畑を耕していた。観察者の私にも積極的に労働力としての協力をもとめ、私はブーシェ流の牛耕指導をしてもらった。

ブーシェの畑を耕した日から数日後の午後、バルチャ家とブーシェとの間で「いざこざ」が起きた。牧童の不注意でバルチャ家のウシがブーシェの畑を荒らしたと怒鳴りこんできたのである。牧童は、ギリギリのところで食い止めたし、事実、畑は荒れていないだろうと主張する。ムティックも牧童の主張を支持したが互いの意見が食い違い、しまいにはムティックとブーシェは怒鳴りあいながら30分近くも口論を続けた。いつも陽気で優しいブーシェが初めて見せた殺氣立った態度に、私は驚きを隠せなかった。翌日私は、一人でブーシェの家を訪れた。彼はいつものように陽気で優しく、昨日の問題がすでに解決したかのように私に振舞った。彼の顔をよく眺めてみると、2年前よりも若干痩せこけているのに気がついた。タバコをふかしながら淡々と語るその仕草は印象的だった。彼が喫煙するのを見たのはこれが初めてだったからである。

その事件から1年後の2010年5月、私が前回の調査を終えて日本に帰国した後に、もっと大変な事件が起きていたことを、村に着くなり知った。ブーシェが村からいなくなっていたのである。加

えて、バルチャ家のムティックとその兄アバラもいなくなっていた。

ことの発端は、私が村を去ってから3ヶ月後のある昼間に起こった事件だったという。一部始終を見ていた人によると、ブーシェは昼間から酔った様子で、アバラの名前を呼びながらバルチャ家の前に仁王立ちしていたという。アバラが出てくると、突然隠し持っていた鉄の釘で、アバラの目を狙って襲いかかったという。アバラの片目は潰れた。その時近くにいたムティックは、目を負傷したアバラと共に反撃にでて、ブーシェにアゴの骨と鼻の骨、歯を折る重傷を負わせた。この事件で、お互いに心身ともに深い傷を負つただけではなく、喧嘩両成敗の結果、ブーシェは懲役2年、アバラとムティックもそれぞれ懲役1年の判決を受け刑務所に入れられることとなってしまった。

私はそのころのブーシェの様子を複数の人から聞きとった。変わったことといえば、酒をよく飲むようになり、タバコも多く吸うようになっていたことだという。酒場では、色々な人と喧嘩をよく起こしていたらしい。以前の陽気な彼らは想像もつかないほどの荒れっぷりだったという。1年前の、放牧時のトラブルをめぐる激しい口論が頭をよぎる。私は、ムティックとアバラ、そしてブーシェに会うために刑務所へ足を運んだ。アバラは片目が潰れてしまい、ひどく落ち込んでいるのか言葉数も少ない。ブーシェの怪我は治癒したようであったが、以前のような陽気さではなく、さらにやせ細っていて別人のように感じた。彼は何も語ろうとしなかった。ただ私が来たことに対して笑顔をみせてくれただけであった。

私は、この事件が個人間だけの問題ではおさまらず、今まで協力しあっていた世帯間の関係の悪化にまで繋がるのではないかと危惧した。しかしその予想は覆された。バルチャ家の家族は1人残されたブーシェの奥さんを気遣うように、さまざまな手助けをしていた。とくに、男性にしかできない農作業を手伝うなど、男手のいなくなった彼女のくらしを気遣って、頻繁に家を訪れていた。当初、私にはそのような行動がひどく奇妙なものに思えた。自分の家族に一生残る傷を負わせた、恨みを抱いて当然の相手の世帯を助けることなど、理解に苦しんだ。

しばらくして、バルチャさんの妻からこんな言

葉を聞いた。「ブーシェがしたことは悪いことだ。皆が刑務所に入るのも残念なことだ。しかし、この問題は個人のことだけではなく、我々の地域の問題である。だから、今、苦労しているブーシェの妻を地域で助ける。困った時は助けあうことが大切なのだよ」。もちろんバルチャ家には、「ブーシェを殺してやりたい」といった発言をする者もいる。しかし、私はバルチャさんの妻の言葉から、人々がこの問題を個人の責任だけに帰してしまうのではなく、地域全体の問題と捉えたうえで、その問題から生じる損失を共に皆で補い、協力しながら乗り越えようとする術を探っていることに気づかされた。私自身もこの仕組に加わることでさらに「それでも助けあう」ことについて理解を深められないかと考えるようになった。

働き盛りの男3人が服役中であるため、牛耕シーズンのこの時期に労働力が不足するという事態がおきた。私は調査を兼ねながら、畑を耕すことで協力できないかと思い、ムティックやアバラ、ブーシェの代役として畑を耕した。まだまだ未熟な私に彼らほどの仕事ができたとは思えないが、私はこの体を使った手助けを通じて、地域の牛耕技術をより詳細に理解することができるようにになった。それに加えて私自身が日々牛耕をすることで、「助ける」という感覚で畑を耕すのは地域の文脈ではなじまず、「助けあうのがあたりまえ」と考えると理解できる部分があることに気がついた。そのきっかけは、街で見知らぬ人と会話しているなかで、「外人がよく農民を助けるために耕すね」と言われて違和感を感じ「違う、助けあうのはあたりまえだから」と反射的に答えた経験にあった。今思うと地域の人々の考え方や振る舞いを体全体で理解しようとするなかでたどり着いた、私の一つの潜在的な答えが浮き彫りになった瞬間だったと思う。

帰国間際、ブーシェやムティックに別れを言うために刑務所を訪れた。ブーシェは私が彼の畑を耕したのを聞いたのか、「今度は一緒に畑を耕そう」と最後にぼそっと言った。この言葉から私は、現状を乗り越え再び地域の未来を背負っていく若い担い手の一人に彼が更生していく可能性を、感じ取ることができた。

何がブーシェをこのような事件に追いやつたのか、その本当の動機はいまだにわからない。ブー



写真2：牛耕の作業の合間に腹ごしらえで食事が振舞われ、皆で分かち合う。

シェが一生取り返しのつかない傷をアバラに負わせてしまった罪も重い。アバラの苦痛は計り知れないし、さまざまな人に悲しみをもたらす事件になったのは事実である。けれども事件を個人の問題に帰せず、地域全体の損失ととらえ、人々が「助けあい」で問題を乗り越えようとする姿を垣間見ることができた。私が当初抱いたなぜ「それでも助けあうのか」という疑問は、バルチャさんの妻の言葉や、牛耕の実践、街の人との会話を通じて、「助けあうのがあたりまえ」と解釈するに至った。助け合いの仕組みをどのように理解したらいいのかという問に対してはまだ答えは見いだせていないが、この事件を通じて、問題を地域で共有し、その損失に対して、出来る範囲の余力をあたりまえに分

け合うことで対処していくことの強さを確認したと思う(写真2)。

だからこそ、「自分はHIVポジティブだ」と何の躊躇もなく振る舞える、前向きで陽気なブーシェの抱える不満や不安を、どうして事件が起きる前に汲み取り分配し解消することができなかつたのか、とも思ってしまう。私は事件の背景には、一生逃れることのできないHIVと上手につきあいきれていかない彼のジレンマが少なからず関連していたのではないかと推測する。ブーシェの奥さんも現在HIVポジティブのため薬を飲んでいるのを私は目撃した。この病気の問題に対しても、地域の「あたりまえに助けあう」力で、全面的に取り組んでいってもらうことを切に願う。

(たなか・としかず／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)